大阪教区の皆様へ

大阪大司教　安田　久雄

「主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」（Ｉコリント 15 章 58 節）

今日私たちは阪神淡路大震災から二度目の聖霊降臨を迎えました。地震直後に策定した「新生」の基本方針とその計画が、多くの皆様のご協力によって着実に前進しつつあることを心から感謝します。

大阪教区は、震災で大きな被害を受けた皆さま、小教区、修道院、学校などの諸施設に関わっておられる方々のことを（それは私たち自身のことでもありますが）、絶えず意識して過ごしてまいりました。

震災後の物心両面のご苦労と生活再建への御努力に対し、教区としてできるだけの協力をさせていただいておりますが、力の足りないところも多々ありましたことを申し訳なく思っております。今後も皆さまの声を聴かせていただく努力を続けながら、可能な限りの協力をさせていただく所存であることをお約束致します。

「新生」の二年目にあたり、今後のあり方についての文書を発表致します。もっと早くに出したかったという思いと、もっと浸透してから出すほうがよいのではないかという両方の思いがありましたが、教会の誕生日である聖霊降臨を祝う今日がそれにふさわしい時であると判断致しました。新生計画実施要領作成委員会において、委員の方々と池長協働大司教と私とで作成した文書を、教区顧問会と司祭評議会での検討と訂正を経て、今日こうして公表させていただくことになりました。

大阪教区の刷新、つまり、一人ひとりの信仰の「新生」とそれを生きる信仰共同体となるための意識の転換、組織改編、新たな養成を進めることが「新生」計画であり「新生」運動です。私たちが求めている「新生」は、ここ十年あまり、日本の教会および大阪教区が、真に福音を宣べ伝える教会となるために、二度にわたる福音宣教推進全国会議などを通して進めてきた歩みと同一のものです。さらに第二バチカン公会議以来、世界の教会が歩んできた道に沿った、福音の使命を実現する教会のあり方の具体化です。この歩みは、私たちに示されている「時のしるし」を受け止めて始めたものです。主のみ旨を選び取ること、つまり識別に基づいた「新生」の教会の姿を明示し、大阪教区の今後を展望することに致します。教区のすべての皆様とともに主のお望みになる教会共同体実現のために、強い決意を持って福音的変革を進めてまいります。

現在、世界の教会はキリスト紀元（西暦）2000 年の大聖年の準備に入っています。教皇ヨハネ・パウロ 2 世は、「新しい千年期のための最良の準備は、第二バチカン公会議の教えをできる限り忠実に個人と全教会の生活に適用すると、あらためて誓約することによってのみ可能となります」（教皇書簡『紀元 2000 年の到来』20 項）と述べ、公会議が始めた刷新の歩みが、信者個人の生き方と教会のあり方に反映しているのかどうかを反省する必要を説いておられます。大阪教区が第三の千年期

に主におささげするものは、何よりも「新生」への決意とその目に見える取り組みであると確信しています。

今回の文書は、今後の基本的な方向を明示することを意図しております。地区及び小教区で、また信徒・司祭・修道者が相互に忌憚のない意見交換を行い、最終的には「新生」する大阪教区の進むべき方向を、聖霊の促しに従ってともに選び取ることを目指します。近いうちにこの文書の続編（第3、4部）として、「地区」を中心としたあり方の具体的な活動に関する文書と、神戸地区評議会の「一年の振り返りと評価」をもとにした文書を発表する予定です。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして……わたしの証人となる」（使徒言行録1章8節）

現実に立脚し、主の導きを受け止め、皆様とともに21世紀を生きる大阪教区を建設していくことができますように、「新生」への痛みを伴うこの歩みに、主のお導きがありますようにと切に祈ります。

1996年5月26日

聖霊降臨の主日